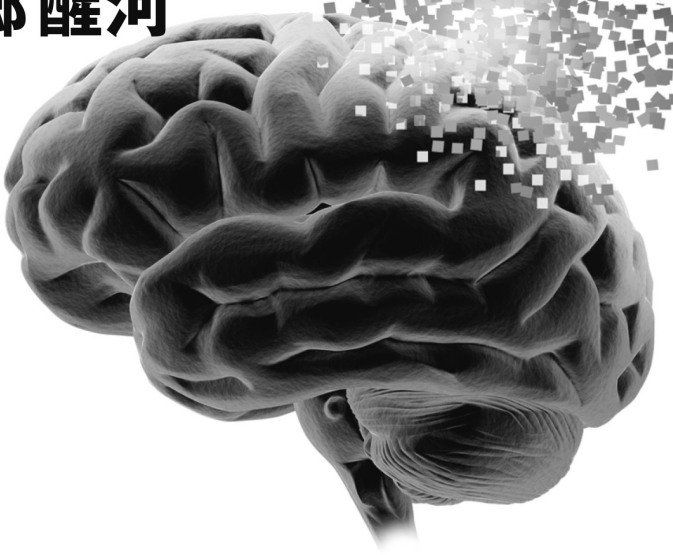
デジタル脳化する人類

21世紀の壁——AI時代の生き残り戦略

水郷醒河



青山ライフ出版

はじめに

「エントロピーを最大化して、21世紀の壁を乗り越えよう！」

……何のことか、分からないかもしれませんね!?

今、押し寄せつつある波は巨大です。これまでに私たち人類が経験してきたどの波よりも大きいと予想されます。

この波を乗り切る方法が二つあると思います。

一つめは、言うまでもなく、山のテッペンに登ることです。

しかし、中途半端な山のテッペンではダメだと思うのです。

今までに人類が遭遇したこともないほどの超巨大な波なのですから、ありきたりな山では呑み込まれてしまうでしょう。

かなりの標高の山でなければ、ダメだと思うのです。

それは、おそらく数万人に一人というくらいのレベルであるのではないでしょうか。

スポーツ選手で言えば、イチロークラスです。

数万人に一人であるくらいに知能の秀でた人とか、金メダルクラスの体力の持ち主とか、それくらいに凄まじい努力のできる人とか、特別に洞察力や発想力などに優れている人ということです。

そのくらいのレベルでなければ、人工知能が巻き起こすこの巨大波は乗り切れないと思うのです。

もちろん、私が言うのは極端であると感じる人も多いでしょう。

山の高さに異論はあるにしても、山のテッペンに位置する人々が有利であることは、私がいちいち説明しなくても分かることだと思います。

だとするならば、高い山、低い山、いずれの場合にしろ、山に登れない大多数の普通の人々はアキラメてしまうしかないことになります。

資産も地位もなく特別の能力もない私などは、完全にお手上げ状態です。覚悟を決めるしかなさそうです。

けれども、私は、私のような底辺の人間にも、いや、私のように何の武器も持っていない人間にこそ、巨大波を乗り切る方策があると考えているのです。

それは、みんなの殺到するような山には、はじめから登ろうとしないことです。

中途半端な山などには登ろうとしないで、むしろ、そこから離れた方がいいと思うのです。

それも、思いっきり遠くのところまで。

もっと、ハッキリと言いましょう。

毎日をウスボンヤリと過ごしている人や、他の人と同じことだけをやりたいと思っている人。あるいは、他人の指示でしか動けない人々は、これから押し寄せてくる波に対処できない。まちがいなく呑み込まれてしまうことになる。と、私は確信しています。

そして、もっとも恐ろしいことは、呑み込まれた人々の多くが、その事実に気づかないことです。

あなたが沈没すれば、あなたの家族も沈没することは言うまでもありません。

気鋭の歴史学者「ユヴァル・ハラリ」氏は、著書の中でこう主張しています。

「〝無用者階級〟に没落した多くの人々は、単なるデータの供給源にしかすぎなくなる」と。

私は、今のこのままの方向性で突き進むとするならば、**デジタル脳化した人々**は、データ供給の役割さえ担えない〝完全に**無価値な存在**〟になってしまう恐れも皆無ではないと思っています。

たとえ、そこまで至らなかったとしても、インターネット履歴、買い物履歴、カードデータ、各種診断書、企業・学校・銀行・公共機関への提出書類などの個人データを、ＩｏＴ（Internet of Things＝物のインターネット）とクラウドコンピューティングによって集積した巨大企業が、趣味・嗜好・性向・思考を分析して、コントロール可能な「都合の良い顧客」として、一般大衆を**道具化**してしまうことは、誰でも容易に想像がつくことでしょう。

さらに、もっとハッキリ言わせてもらえば、今のこの世紀に生き残っていけなくなることも想定していた方がよい、と私は考えているのです。

かなりの数の人々が危うい局面に立たされることになるかもしれません。

その最大の根拠が、自分の頭で物事について考えている人たちが、極端に少なくなっていることです。

「親」や「教師」や「教祖さま」や「マスコミ」や「スマートフォン」などの、自分以外の他の誰かの指示によってしか動いていない。あたかも魂の抜け出した「人の形をした影」か「ロボット」でしかないと感じられる人が多すぎるのです。

それこそ「単なるデータ供給源にしかならない人々」だと言えるのではないでしょうか。

お金儲けについてならば、頭を使っている人はたくさんいるでしょう。

けれども、お金という物質はもちろん、概念そのものが近い将来に消滅してしまうことも間違いなさそうです。

生き残るためのヒント・・・〝いかにすればデジダル脳化を防げるのか?〟

すなわち「世紀の壁」を乗り越えて、明日の世界に辿り着くための手がかりが、一つでも見つかればいいと考えて、この本を書きました。

じっくりと読む時間がないという方は、興味をひかれた項目だけをお読みいただいて構いま

せん。

なお、できるだけ整理はしているつもりですが、いろいろな提案や考察が若干は未整理なままであることをお許しください。

〝混沌〟・〝バラバラ〟というのは、まさにこの本のテーマの一つでもあるのです。

デジタル脳化する人類

21世紀の壁――AI時代の生き残り戦略

―目　次―

はじめに　2

序章　新しい時代の希望の探し方　13

第1章　デジタル脳化する子どもたち　19

①「パターンで問題を解く子ども」　20

②「0か100の人々」　26

③「0か100の理由」　30

④「デジタル化する人々」　34
⑤「幼稚化する人々」　38
⑥「傷つきたくない人々」　43

第2章　大きく変わる世界　49

①「お金が消える」　50
②「消え行くもの」　54
③「学校と勉強がなくなる？」　56
④「完全に無意味化する勉強」　58
⑤「勉強が無意味化するのは良いこと」　60

第3章　21世紀の壁　63

①「21世紀は淘汰の時代」　64
②「21世紀の壁」　65
③「フルイに引っかかるのは底辺の人間？」　66

④「なぜ、底辺の人間にチャンスが来るのか？」 72
⑤「これは歴史の必然なのか？」 73

第4章 逆転する世界 77

①「逆転する人々」 78
②「逆転現象の理由」 83
③「人工知能のアナログ化と人間のデジタル化」 92
④「デジタル化の原因」 94

第5章 壁を乗り越えられる人 101

①「デジタル革命に生き残れる人」 102
②「人間らしさの徹底」 104
③「莫大に広まる読書格差」 110
④「体験こそが、最大の武器」 117
⑤「無駄は、人間らしさのキモ」 122

⑥「労働が消滅したら」　126
⑦「宗教と哲学の時代」　130
⑧「マイナス思考のできる人だけが生き残る」　133

第6章　見えない壁の向こう側　137

①「国家の消滅」　138
②「〝理想〟というもう一つの無駄を追い求める情熱」　141
③「人間と道具は反比例の関係」　146
④「エントロピーの巨大な人間をめざせ！」　155
⑤「受容力と柔軟性の土台は確固とした自己にある」　161
⑥「明日の世界は、私たちが決めるもの」　164

終　章　169
まとめ　178
あとがき　183

序章　新しい時代の希望の探し方

「学校が消滅して、勉強の意味がなくなる」としたら、あなたは嬉しいでしょうか、それともショックを受けるでしょうか？

今、ＡＩ革命が起こりつつあります。

これからの一〇～二〇年の間に、さまざまな仕事がなくなると言われています。

なくなるのは、仕事ばかりではありません。

学校と勉強も、消えてなくなるでしょう。少なくとも、今の子どもと若者たちがやっている受験のためとか資格のための勉強はなくなってしまいます。

上位の層と貧困層との入れ替えも起こる可能性があります。

そして、お金も消滅してしまう運命にあると言われています。

ＡＩ革命について、イロイロな意見を、サマザマな人が述べています。大きく変わるという人。あまり変わらないという専門家たち。

当然のこと、期待と不安が交錯しています。

私は、どの人の予測をも上まわる形で推移していくことになると考えています。

たとえば、地震でのダメージを考えてみてください。大雨や台風の被害をふり返ってみましょう。

どんな場合でも、人々の予測を超えているのではないでしょうか。

あるいは、明治維新の時、または、産業革命の際にはどうだったでしょう。

その後の社会の変貌の様を、きちんと見通せていた人が、いったいどれくらいいたでしょうか？

私は、人間と人工知能との立場の逆転ばかりではなく、精神構造の面でも逆転劇が起こるだろうと予測しています。

とは言っても、悲観的になっているわけではありません。

どちらかと言えば、ワクワクする気持ちの方が大きいかもしれません。

どのような結果になるにせよ、変化の様をこの目で確認できることはエキサイティングなことです。

また、たとえどんなに困難が重なった場合にも、希望はどこにでも見つけられるはずです。